

Incident Noninfectious Uveitis Risk after Immune Checkpoint Inhibitor Treatment  
Ophthalmology, 2024;131(7):P867-869.

免疫チェックポイント阻害薬（Immune Checkpoint Inhibitor：ICI）治療中に非感染性ぶどう膜炎を発症する症例を時折みかけます。この論文では、約13年間の韓国健康保険審査評価院のデータをもとにICI投与後の非感染性ぶどう膜炎のリスクについて調べた結果が報告されています。肺癌・膀胱癌・皮膚悪性黒色腫に対して、ICI（ニボルマブ・ペムブロリズマブ・アテゾリズマブ・デュルバルマブ・アベルマブ）による治療を受けた群（約16000例）と細胞障害性化学療法を受けた群（約43000例）を抽出し、治療開始後60日以内と61-180日に非感染性ぶどう膜炎を新たに発症した症例について検討されています。その結果、ICI治療群の33例（0.20%）、細胞障害性化学療法群の48例（0.11%）でぶどう膜炎の発症がみられ、ICIによる治療を受けた群はそれ以外と比較して、治療開始後60日以内のぶどう膜炎の発症が2.47倍多くみられたこと、皮膚悪性黒色腫がICI治療後のぶどう膜炎の発症の危険因子であったとのこと。また、ステロイド点滴治療を要さない程度であった18例でICIが再投与され、そのうち3例でぶどう膜炎の再発がみられたこと、ステロイド治療を要した12例ではICI再投与に伴い5例で再発がみられたとのこと。ぶどう膜炎を発症した症例でもICIを再投与している症例が多い印象を受けました。他科領域でICIによる治療が行われることが増えており、ICI治療中に発症するぶどう膜炎症例を経験することが増えることが予想されますので、今後、日本人でも同様の検討が望まれます。（担当者： 近畿大学 岩橋 千春）